

## 目次

## 1章 使役動詞・知覚動詞とその関連表現

使役動詞 1

〈1〉 S + 使役動詞 + O (主に人) + V' (原形不定詞) . 1

① make, have, let ② get, cause, force, compel ③ help

〈2〉 S + 動詞 + O (主に物) + 過去分詞. 2

知覚動詞 3

〈3〉 S + 知覚動詞 + O + V' (原形不定詞) . 3

〈4〉 S + 知覚動詞 + O + 現在分詞. 3 ・ 〈3〉と〈4〉の違い 3

〈5〉 S + 知覚動詞 + O + 過去分詞. 4

使役動詞・知覚動詞とその関連表現に関するその他の注意点 5

《発展》 have と get の目的語の後ろに置くことのできる品詞は様々であり、表すことのできる意味範囲もかなり広い 6

## 2章 副詞節・名詞節・形容詞節の時制

① 副詞節の時制 1

② 名詞節の時制 2

③ 形容詞節の時制 3

時制全般に関するの注意点 ・ 完了形と単純形について 3 ・ 過去完了形と過去形について 4

## 3章 「目的」と「程度・結果」を表す言い方

「SがS自らのために」というように、「目的」とする行為を行う主体が主語と一致するときの表現 1

程度「～するほどに…」または 結果「(十分) …なので～」を表す表現 1

「Sが第三者のS'のために (=S以外のS'のために)」というように、「目的」とする行為を行う主体が主語と異なるときの表現 2

「結果」を表す ... so that ... 3

「目的」を表す不定詞についての諸注意 3

enough について 4

## 4章 文型について

前置詞で始まる句のほとんどはSやOにはなりません。(ただし不定詞は除きます。) 2

to be の省略について 3

副詞は修飾語 (M) にしかならないので、文型を考える際には常に無視します。 3

## 5章 不定詞の意味上の主語について

形容詞が人の性質・性格を表すものなら、for ではなく of を用います。 2

動名詞の意味上の主語について 2

## 6章 結論を早く言う

文型を中心とした文の構造を、できるだけ文頭に近い位置で明示しようとするのが英語の話者・書き手の基本姿勢です。 1

名詞句に対しては、形式目的語を使うことは普通はしません。 1

「文章」においても、やはり結論を先に述べます。 2

## 7章 否定語は繰り上がりやすい

- not A but B における not の繰り上がり 1
- 比較の構文における否定語の繰り上がり 1
- any (形容詞) や either (代名詞) を否定語の前に置くことはできません。 2
- 否定的な内容を表す副詞句の繰り上がり no longer など 2 in vain 2

## 8章 日本語と英語の修飾体系の違いについて

### 9章 他の要素に引かれて後ろにまわる (まとめられるものはまとめる)

- 英語においては、語と句の結びつきが強いとき、それらを一体として後置するのが普通です。
- 「語」としての副詞の他にも副詞句があるときは、それと一体となって文末に置かれる傾向が強くなります。
- The 比較級 SV, the 比較級 'SV'. の構文においても、「まとめられるものはまとめて前に出します」。

### 10章 疑問文・疑問詞

- 2つのかたちの疑問文 1
- 疑問代名詞を主語にすると常に単数扱い 1
- which と what の違い 2

### 11章 疑問詞と前置詞

- 疑問詞が前置詞の目的語となる疑問文では、前置詞は文末に置くのが普通です。
- 疑問形容詞の場合には前置詞を文頭に上げます。

### 12章 I don't think... 型の否定文など、「否定文であることを早く言う」ことに関して

- I think it will not rain. ではなく I don't think it will rain. とするのが普通です。
- 否定語の繰り上げができない例

### 13章 文否定と語句否定

- 「no single+名詞、no one+名詞」を主部にした文の訳の仕方 1
- 「not a single+名詞、not one+名詞、not a+名詞」といった例は普通、完全否定を表します。 1
- 「no + 比較級 + than」について 2
- 「no+比較級+than」では、強く否定するあまり、一般には「as+反意語の原級+as」に近い意を表します。 2
- not more than ... と no more than ... の数詞の前での使用例 2
- no more than ... は否定的な評価を含意して、「～にすぎない、～でしかない」(= only) の意をよく表します。 2

### 14章 部分否定

- 副詞には意味が強いものが特に多いので、英文の構造上、かなり頻繁に部分否定の文が出来上がります。 1
- 否定語の領域とは無関係に部分否定となる例も、特に形容詞・代名詞を中心に少なからずあります。 2
- both について 2 all について 2
- 否定文中での because-節について 3
- 否定文中での as-節について 4
- 否定文中で、かつコンマによって否定文とは縁切りしたかたちで置かれる肯定の as-節の多くは、though の意を表します。 5

## 15章 and か or か

否定文中での and	1	否定文中の or	2
肯定文中での and と or	4	譲歩を表す and と or	5
		同格や追加説明を表す or	6

## 16章 動詞 (概論)

## 17章 vi (英語の「自動詞」)

先行詞が place の場合には前置詞が省略されるのは顕著	1
受動的な意味を表す vi	2
This watch <i>needs repairing</i> . = ... <i>needs to be repaired</i> .	2
There is some work <i>to do</i> . と There is some work <i>to be done</i> .	3
John is hard <i>to please</i> .	3
Where is she <i>to blame</i> ?	3
The meeting is <i>to be held</i> next Tuesday.	3

## 18章 vt (英語の「他動詞」)

再帰用法 = vt の (意味の上での) vi 化 (= 転換自動詞 converted intransitive)	2
意味の上での vi へと変換するときには、受動態も用いられます。	3
日本人が become, get (to be), grow (to be), come (to be) などを使わないと安心できないところでも、ネイティブスピーカーは あつさり be-動詞ですませてしまうことがよくあります。	3
形だけの目的語を必要とする vt	4
that-節は一部の vt の直接の目的語となることを嫌い、it を要することがあります。	4

## 19章 what か how か

## 20章 「vt+副詞」か「vi+前置詞」か

## 21章 say と tell, speak と talk

## 22章 動詞に関するルールあれこれ

- ・ 特別扱いの動詞 have (と be-動詞) 1
- ・ 「よい意味の動詞」、「悪い意味の動詞」という単純な思い込みは禁物 2
- ・ 名詞をそのまま動詞化 2
- ・ 誤用されやすい動詞 2
 

come と go	2	doubt と suspect	3	influence と affect と effect	3	forget と leave	4
-----------	---	-----------------	---	-----------------------------	---	----------------	---
- ・ 「intended to have+過去分詞」について 4
- ・ 目的語が長いときには特に、目的語を vt の直後には置かない (= 副詞句が割り込む) ことが多くなる 4
 

「vi+前置詞句」の間にも他の副詞句が割り込むことがあります。 5
- ・ 動詞の省略 5
- ・ 目的語の省略 5

## 23章 分詞について

- 現在分詞 ① vi の現在分詞 1  
 ② vt の現在分詞 2  
 過去分詞 ③ vi の過去分詞 3  
     完了の意を表す「be + vi の過去分詞」 3  
 ④ vt の過去分詞 3

## 24章 助動詞

1. shall について 1  
 2. will について 1  
     ・ 「意志」や「拒絶・固辞」 1      ・ 推量 1  
     ・ 「習性」、「特徴的な振る舞いや行動習慣」、「(物理的) 特性」、「当然」など 2  
 3. 進行形のかたちで「進行」以外の意味を表す例について 2  
     3-1. be going to-不定詞 及び be -ing について 2  
     3-2. 進行形が表すその他の意味 3  
         3-2-1. 「一時的な状態」を表す 3  
             完了形と完了進行形について 3  
         3-2-2. 「いや増す程度」を表す 4  
         3-2-3. 繰り返される行為を表し、そのことに対する「いらだち」や「非難」を表すことも多い 4  
         3-2-4. 「命令」や「拒否」を表す 4  
         3-2-5. 「丁寧」な表現となる現在進行形・過去形・過去進行形 5  
 4. must と have to の区別 6  
 5. その他    ・ 否定の推量の can't と must not の違い 6  
             ・ can と may の違いについて（「推量」や「可能性」を言うとき） 7  
             ・ cannot / can't / can not の表記について 8

## 25章 be to-不定詞

- ・ 予定 1  
     「was [were]+to-完了形不定詞」 2  
     is to blame は普通は ... is to be blamed とはせずに、能動形ですませます。 2  
 ・ 運命（結果） 2  
 ・ 可能（不可能） 2  
 ・ 意志 2  
 ・ 義務・命令 3

## 26章 分詞構文

- 分詞構文の前にコンマを置かないことはよくあります。 1  
 分詞構文の意味上の主語が主節の主語と異なる独立分詞構文には、主語を置くのが原則です。 2  
 懸垂分詞構文 2  
 慣用表現の独立分詞構文 3  
 compared to ... や followed by ... 等は形容詞句としても分詞構文としても多用されます。 3  
 前文の内容が分詞構文の意味上の主語になっている例 3

## 27章 副詞

副詞の配置一覧	1
1. 副詞が修飾するもの	2
2. 副詞の位置	4
2-1. 副詞の基本的な配置規則	4
2-1-1. 一般論 (副詞は被修飾語のできるだけ近くに置く)	4
2-1-2. 動詞を修飾する副詞の位置 (最も一般的な配置パターン)	4
① 動詞の直前に置きますが、be-動詞 (連結動詞) であればその直後に置きます。	5
② 助動詞があれば、最初の助動詞の直後に置きます。	5
③ 分詞・形容詞との結びつきの方が強い場合には、それらの直前に置かれます。	6
④ 副詞関連語句を一体としてまとめる	7
⑤ 副詞が後ろから前の名詞を修飾する例	8
⑥ その他の注意点	9
・ 比較級、最上級の意味を強めることのできる副詞	9
・ not と never の使い分けについて	9
2-2. 副詞の意味カテゴリーによる位置の違い	10
2-2-1. 時・時点、時間・期間、時間的前後関係、あるいは場所などを表す副詞	10
2-2-2. 発信者の考えを述べたり、これから述べる内容を提示したりするための副詞 (=文修飾の副詞) の位置	10
① 接続詞的な働きをする	10
② これから述べる内容の分野を明示する。または、どういう観点から述べるのかを 明示する	11
③ 発信者の考えや主観的な評価を述べる	11
④ 発信者の気持ちや感情を表すもの	12
文修飾の副詞の位置	13
2-2-3. 様態 (=物事のありかたや行為のありさま) を表す副詞の位置	13
2-2-4. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」、あるいは「主語の感情や意志を表す副詞」の区別	14
2-2-4-1. 副詞と形容詞による文意の区別	14
2-2-4-2. 「主語の感情や意志を表す副詞」について	15
2-2-4-3. 「文修飾の副詞」と「様態を表す副詞」の、位置による区別	15

## 28章 分離不定詞

## 29章 単純形副詞 (およびその関連表現)

## 30章 形容詞

1. 形容詞等を並べる順	1
・ 「一時的な状態を表す」例	3
2. any, every, each の使い分け	4
・ as ... as any ... について	6
3. a few, few に関して	6

4. 形容詞に関する諸注意
- ・ high, low や large, small などの使い分けについて 7
  - ・ worth の用法 8
  - ・ 叙述用法の形容詞などが行為を表す例 9
  - ・ pleasant は vt 由来の、-ing が付かない形容詞であり、vt の現在分詞に相当する。 10
  - ・ 叙述用法の形容詞の最上級の前には the を置かない。 10
  - ・ 「the + 形容詞」について 10

### 3 1 章 形容詞相当名詞 (形容詞的名詞) = 名詞の形容詞への転用 および ハイフンワード

- ・ 形容詞相当名詞の多くは、a word processor, 3 meter cube のように単数形です。 1
- ・ moneyed assistance 「金銭的援助」のように -ed をつけて形容詞化することもよくあります。 1
- ・ 数や単位の表記に関して 3
- ・ ハイフンワード 3

### 3 2 章 「形容詞+名詞」を活用する表現法について

### 3 3 章 代名詞

1. 代名詞が指すもの 1
  - ・ 「人称代名詞」と「指示代名詞」の区別 1
  - ・ 時間・距離・天候・気温・明暗等を表す it、形式主語・形式目的語を表す it、「漠然とした状況を表す」ための it、  
文法的体裁を整えるための it など 2
  - ・ 前出の人を受けるのではなく、一般の人のことを表したり、当局や担当の人たちを表す they 2
  - ・ 「一般の人」を表す he, she 2
  - ・ it や one を使えない例 2
  - ・ one は不可算名詞を受けることはできません。 2
  - ・ 不可算名詞を it や that で受けることはできます。 2
  - ・ 会話をしている当事者を指すのに he, she, they は用いません。 3
  - ・ 人を指す it について 3
  - ・ she が受けることのできる名詞 4
2. これから述べること (後方照応) について 4
  - ・ 「これから述べること」を指す this, these について 4
3. 代名詞に関するその他の注意点 4
  - 3-1. 形容詞と同じかたちの代名詞 4
    - 代名詞として後ろに of を置いて用いる場合には、of 以下には何らかの範囲・範疇に限定される  
名詞を置きます。 5
  - 3-2. 一般の人を表す代名詞 6
    - ・ you と we について 6
    - ・ one, people, they について 6
  - 3-3. someone, somebody の「ひとかどの人物」の訳例について 7
  - 3-4. 疑問代名詞 (who, what, which) を主語にすると常に単数扱い 8
  - 3-5. 人称代名詞と関係代名詞 10
  - 3-6. 性別不明かつ単数扱いの一般人を受ける代名詞 10
  - 3-7. 前者・後者 11
  - 3-8. each other と one another 11
  - 3-9. 代名詞の格 12

- 3-10. 文法的整合性をとるために置く代名詞 12
- 3-11. 代名詞を並べる順 12
- 3-12. 動名詞の意味上の主語について 12

### 3 4 章 動詞的動名詞と名詞的動名詞

### 3 5 章 配分単数・相互複数・強意複数

- 配分単数 1      相互複数 2      強意複数 2

### 3 6 章 関係代名詞

- 1. 関係代名詞の制限用法（限定用法）と非制限用法（非限定用法）について 1
  - 1-1. 序論 1
  - 1-2. 「継続用法」という文法用語、および訳の仕方について 1
  - 1-3. 非制限用法についての要点整理 3      ・ 同格表現において 5
  - 1-4. 関係代名詞の代りに現在分詞を用いる表現法について 5
  - 1-5. 代名詞と関係代名詞 7
  - 1-6. 所有格・指示形容詞と関係代名詞 7
  - 1-7. 物質名詞等と関係代名詞 8
  - 1-8. 抽象名詞と関係代名詞 9
  - 1-9. 固有名詞と関係代名詞 9
- 2. 冠詞と関係代名詞 10      ・ 「関係代名詞+be-動詞・be-助動詞」の省略 11
- 3. 関係代名詞の who が使えない例 12
- 4. 関係形容詞 13      ・ whose との違い 13
  - ・ 関係形容詞の what, whatever, whichever 14
  - ・ whose に関して 15
  - ・ 付帯状況を表す with 以下の処理について 17
- 5. 関係代名詞がそれに変わる前はどこに位置していたものなのか 19
- 6. 連鎖関係詞節 20
- 7. 二重限定 21
- 8. 関係代名詞の単複 22
- 9. 疑似関係代名詞 23      ・ as について 23      非制限用法の例 23
  - 制限用法の例 24
    - as many [much] (名詞) as ... 24
    - the same ... as ... 24
    - such ... as ... 24
    - as ... as ... 25
  - ・ than について 25
  - ・ but について 25
- 10. その他 26      ・ 関係代名詞のあとに形式主語を置く例 26
  - ・ A is to B what C is to D. の構文について 26

**37章 関係副詞**

- 非制限用法についての要点整理 1
- 関係副詞 **when, where** の先行詞 2
- 関係副詞は主語や目的語にはなりえない 3
- 関係副詞の先行詞は、言わずとも、また書かずともわかることが多いのでしばしば省略されます。 4
- why** と **how** について 5

**38章 仮定法**

- 1. **could** と **was able to ...** の違いと、過去時制の **could** と仮定法過去の **could** について 1
- 2. **could have** と **could not have** について 5
- 3. 丁寧表現・婉曲表現など 8 過去形・過去進行形による丁寧表現 8
- 4. 依頼をするときの表現 9
- 5. **if**-節を使わない仮定法 9
- 6. 仮定法の倒置 11
- 7. 普通の条件節に近い仮定法 12 **as if** や **if only** のあとには、現在形を置くこともあります。 13  
**as if + as ... as** 構文 13
- 8. **should, were to** について 13
- 9. その他 14 **I wish S'V'** について 14  
**that**-節中での **should**、あるいは仮定法現在などについて 15  
仮定法+比較 16

**39章 対等要素を並べる (並列法)**

- ・ 文と文をつなぐとき 2
- ・ **that** を入れるべき例 2
- ・ 関係詞の反復 4
- ・ **be**-動詞・**be**-助動詞の反復 4
- ・ 主語の反復 4
- ・ 同じ文法要素の反復 5
- ・ 前置詞の目的語を明示する 6
- ・ 「**vi**+前置詞」の目的語と **vt** の目的語の共用 7
- ・ 三つ以上の要素を並べる場合 (および「同格」について) 7 **and** が何と何をつないでいるのか 8
- ・ つながりが見えにくい、悪い例 8

**40章 as ... as 構文について**

- 「格」について 3
- as well as** について 3
- as ... as** を用いた強調表現 5
- as ... as** を用いたその他の関連表現 6
  - ・ 仮定法の **as if** とともに用いて 6
  - ・ **as ... as any** および **as ... as ever** 6
  - ・ **as many [much] (+名詞) as ...** のかたちで、後ろの **as** が関係代名詞となる例 7
- as far as SV [so far as SV]** と **as long as SV [so long as SV]** 7
- その他の注意点として 9

#### 4 1 章 more than の関連表現

- not more than ... と no more than ... 1
- not more than ... と no more than ... の数詞の前での使用例 1
- 後ろに置いた数を含まない more than ..., less than ..., over, above, under, below 2
- A is no more B than C is D. の構文について 5
- A is no less B than C is D. の構文について 5
- than を用いない比較級について 6
- 日本語につられて than を用いてしまいがちな例 7

#### 4 2 章 but と and の使い分けの例 (逆接か順接か)

#### 4 3 章 名詞の意味を限定する as や譲歩を表す as などについて

#### 4 4 章 unless

#### 4 5 章 コロン・セミコロン・ダッシュ・スラッシュ・コンマ

#### 4 6 章 接続詞に関するその他の注意点

- ① He is taller than *me*. と ... than *I*. と ... than *I am*. 1
- ② when や before, until などの訳は柔軟に 1
- ③ since について 1
- ④ 「so ... that ... の so」と「very の意の単独の副詞としての so」について 2
- ⑤ even if と even though の違い 3
- ⑥ 様々な接続詞 4
- ⑦ but の少し特殊な用法 5
- ⑧ 接続詞の省略 6
- ⑨ その他 7

#### 4 7 章 倒置

- 1. 何のために倒置させるのか 1
  - ① 結論を早く言う。 1
  - ② 前出した内容 (=旧情報) を文頭で受ける。 1
  - ③ 強調する。 2
  - ④ 文を簡潔にする。 2
- 2. 否定語 (句) + 倒置文 2
- 3. 補語 + 倒置文 4
- 4. 目的語 + SV 5
- 5. 副詞 (句) + 倒置文 5
- 6. is so ... that ..., is such that ... の強意形は、So [Such] + 倒置文 7
- 7. 「so + 倒置文」と「so + SV」 7
- 8. 仮定法の倒置文 8

9. 譲歩を表す倒置文と命令形の文	8	命令形で譲歩を表す文について	9
10. その他	9		
・ SVOC の文型で、目的語が長いときには SVCO の語順を採ります。	9		
・ 副詞句は本来の位置からはずれて、文頭の方に上ってくるがよくあります。	10		
・ 感嘆文でも倒置することがあります。	10		
・ as, than 以下でも倒置することがあります。	10		
・ 「the 比較級 ..., the 比較級...」での倒置	11		
・ 主節を挿入や後置して逆順になることはよくあります。	11		

## 48章 前置詞

### 1. 前置詞の目的語となり得るものの品詞・種類

① 普通名詞・物質名詞・抽象名詞	1	② 代名詞	1	③ 動名詞	1	④ 副詞	1
⑤ 形容詞・分詞	1	⑥ 不定詞・原形不定詞(動詞)	2	⑦ 句	2	⑧ 節	2

2. of について	5	2-1. 主格関係と目的格関係	5
		2-2. 同格関係	5
		2-3. about の意の例	6
		2-4. out of の意の例	6
		2-5. 「～から」= from ではない	7
		2-6. 分離・隔離の of の例	9
		2-7. 「of+抽象名詞」をつくる of	9
3. 二重所有格、および主格関係と目的格関係を表す of について	11		
		3-1. 所有格と of について	11
		形容詞の most ... と代名詞の most of ... の使い分け、およびその類例	11
		3-2. 二重所有格	12
		3-3. 主格関係と目的格関係	13
		3-4. change of ... と change in ... の違いについて (「全体」か「一部」か)	16
		3-5. 属性を表す of について	17
4. on について	18		
5. off について	21		
6. 動的な意味合いをもつ前置詞句(主に「vt+目的語」の後に置く例について)	22		
7. 結果を表す前置詞 to, into, with, without	23		
8. 到達点を表す to と、方向を表す for, toward, at	25		
9. between と among	26		
10. 「今から～の後に」と言う場合の in	26		
11. in と for あるいは during の違いについて	29		
12. 「期間」を表す over について	31		
13. 時を表す from について (since については 46-1 下からを参照)	32		
14. by, before, until / till	33		
15. 前置詞が示す範囲(主に「時」を表す前置詞について)	34		
16. but	35		
17. anything but ... と nothing but ... について	36		
18. but と except の違い	36		

19. except と except for	37
20. besides, apart from	38
21. 比較に使う over と above など	38
22. for と against	39
23. through	39
24. 前置詞の省略	40
・ in は省略される傾向が強い	41
・ All you have to do is (to) do... などの構文における to	41
・ prevent [stop, etc.] + 目的語 + from ... ing の from の省略	42
25. 前置詞句の挿入 (あるいは本来の位置からの移動) について	42
26. その他	42
「about と on の違いについて」「by の後の冠詞について」など	

#### 49章 英語での「文章」の組立て方の特徴 (= 「結論や主題・テーマ等を早く言う」ための表現法)

論の展開の仕方	1
パラグラフについて	2

#### 50章 前出の語・内容を受けることを優先する

代名詞は「vt (他動詞) + 副詞」のあいだに挟めて、たとえば Check <i>it</i> out. とし、Check out <i>it</i> . とはしません。	2
文頭で旧情報を受けると、受動態や倒置した文になりやすいと言えます。	4
無生物主語について	5
受動態について	5
倒置について	7
話の流れをよくする	7
文頭で旧情報を受け取ることにはしないときにも、「つなぎの語や句」を意識するのは大切です。	8
文末・文頭に置いて強調する	9

#### 51章 同じ言葉の繰り返いを嫌う

#### 52章 類義語・同義語の反復 (並べて意味を強める)

#### 53章 多義語

#### 54章 発音とアクセントの基本ルール

発音の規則	2
アクセントの規則	3

「目的」と「程度・結果」を表す言い方

「SがS自らのために」というように、「目的」とする行為を行う主体が主語と一致するときの表現

・ 肯定的目的

単文 He works hard **to** pass the examination.

He works hard **so as to** pass the examination.

He works hard **in order to** pass the examination.

複文 He works hard **so that he can [may, will]** pass the examination.

※ 次のように助動詞を置いていない例も見られますが、このような例は稀です。

Exert yourself vigorously **so that you finish** the job on time.

※ この that を省略することがあります。 I stepped aside **so (that) he could go in**.

He works hard **in order that he may** pass the examination.

※ in order that ... では、ほとんどの例で助動詞は may, might が用いられています。

・ 否定的目的

単文 He works hard **so as not to** fail the examination.

He works hard **in order not to** fail the examination.

※ not to だけでこの意を表すのは極めて稀です。(下の例では、形容詞や名詞を修飾しているとも考えられます。)

Be **careful** not to make the same mistake.

We made a **pact** not to argue anymore. (これ以上論争はしないように申し合わせた。)

cf. He was **wise** enough not to speak too often.

複文 He works hard **lest he (should)** fail the examination.

He works hard **for fear (that) he should [might, would]** fail the examination.

※ 次のように助動詞を置いていない例も見られますが、このような例は稀です。

Friends will not be paired together, **for fear that they find** a comfort zone.

He works hard **in case he should fail [he fails]** the examination. ※ should については 2-1 下参照。

He works hard **so that he will [may] not** fail the examination.

程度「～するほどに…」または 結果「(十分) …なので～」を表す表現 (どちらの意かは文脈で判断します。)

単文 He works **so** hard **as to** pass the examination.

He works hard **enough to** pass the examination. ※ enough の訳の仕方は本章 3-4 を参照ください。

He is **such** a hard worker [learner] **as to** pass the examination.

※ 複文なら He is **such** a hard worker [learner] **(that)** he can [will] pass the examination.

また、関係代名詞の as を用いた例は 36-24 下を、... is such that ... については 47-7 を参照ください。

複文 He works **so hard (that) he can [will]** pass the examination.

※ that を省略することがあります。 → 3-3

The marathon runner ran **so hard (that)** he was fit to drop. (今にも倒れそうだった)

so を省略することもあります。 I worked hard **(so)** that I might succeed.

※ 「目的」であれ「程度・結果」であれ、まれに動詞の前に so を置くことがあります。

Jim **so** enjoyed Kyoto that he's determined to visit again. = Jim enjoyed Kyoto **so**, that he's....

**So** live your life that old age will bring you no regrets. (年をとって後悔しないように生きなさい。)

## 不定詞の意味上の主語について

下の前者の解釈では *for a young girl* は不定詞の意味上の主語ですが、後者ではそうではなく、独立した副詞句です。

*It is dangerous for a young girl to walk alone late at night.*

(若い女性が深夜に独りで歩くのは危険である。) (深夜の独り歩きは若い女性にとっては危険である。)

書き言葉としてのこの文は上の二様の訳が可能です。ただし、話し言葉では次のようにポーズの位置が異なります。

*It is dangerous | for a young girl to walk alone late at night.      It is dangerous for a young girl | to walk alone late at night.*

意味上の主語であれば、*for ...* は不定詞に対して形容詞的に働き、そのためこの位置から動かせませんが、意味上の主語でなければ副詞句なので、文頭や文末などにも移動させることができます。(例: *To climb a mountain would be an exertion for her.*)

どちらの意かは、書き言葉では文脈によって判断する必要があります。もっとも、このような例は実際には少なく、**たいていの場合、不定詞の前の *for ...* は意味上の主語として置かれています。**

*It is important for you to go and apologize to him at once.* を、

「君がすぐに行って謝ることが(我々にとっては)重要」(*for us* の省略)と解釈すると、

「君がすぐにそこに行って謝ることが君にとっては重要(だが我々には無関係)」と解釈するのでは大違いです。

これも文脈等で判断するしかありませんが、いずれにせよ、その行為をすべき人物は *you* であることは明記されています。

不定詞の意味上の主語の使用は、形式主語を用いる場合に限ったことでは無論ありません。

*There can be little doubt that the best thing is for him to obey his father.*

(彼が父親の言うことに従うのが一番よいというのは、ほとんど疑いの余地がない。)

この文も「誰にとって一番よいのか」については触れてはいないので、「彼がそうしてくれれば我々が助かる」という状況だって考えられます。他方、*There can be little doubt that the best thing for him is to obey his father.* 「彼にとっての一番の策は、父親の言うことに従うことである」なら、それは彼個人についての話です。

次の例も、意味上の主語でしか訳せません。

*It's not good for the oil tank to be so close to the house.* (オイルタンクが家にそんなに近接するのはよくない。)

*Our aim is for students to learn as quickly as possible.* (我々の目標は、学生が可能な限り早く学ぶことだ。)

*For you to interfere in this matter is utterly absurd.* (この問題に君が口を出すなんて筋違いもいいところだ。)

次に「意味上の主語ではない例」を見てみましょう。

*It would be an exertion to her [for her] to climb a mountain.* (山登りは彼女にはきついだらう。)

*It is a comfort to me [for me] to know you are close at hand.* (あなたが近くにおられると知って心強い。)

*It was instructive to Mary [for Mary] to read that book.*

*It has been a joy for me to make many new friends, to renew old friends along the paths of this campus as Secretary of the Faculty.*

1～3例目では、*to ...* の方を辞書は先に載せていますが、*to ...* の方が、意味上の主語ではないことははっきりします。

形容詞用法にも、意味上の主語を置いた不定詞はよく用いられます。

*There is no way for outsiders to establish the truth.* (部外者には事実関係を確認する手段がない。)

*There's a plan for Jack to spend a year in Japan.* (ジャックには日本に1年間滞在しようという計画がある。)

*Is there anybody for Louise to play with in the village?* (その村にはルイズの遊び相手はいますか。)

*I must find somewhere for him to practise the piano.* (彼がピアノの練習をできる場所を探さなければ。)

*The recent tendency for adults to pretend not to see things is deplorable.* (最近の大人たちの見て見ぬふりといった傾向は情けない。)

*We made an appeal for nuclear tests to be stopped but they wouldn't listen to us.* (核実験の中止を要求したが聞き入れられなかった。)

## 否定語は繰り上がりやすい

「結論を早く言う」ために、なるべく文頭に近い位置で否定をしようとする傾向が英語には見られます。

I **only** realized how much I owed my parents **when** I had a child of my own.

= I realized how much I owed my parents **only when** I had a child of my own.

※ only を用いた文の多くは否定的に訳そうと思えば訳すことができますし、ネイティブスピーカーは only をほぼ常に否定語として意識しています。 → 47-4

例えばまた、I **think it will not** rain. **ではなく** I **don't think it will** rain. とするのが普通です。

(ただし、この否定語の繰り上がりは主節の動詞が一部のものに限って行われます。 → 12章)

## not A but B における not の繰り上がり

A man's worth lies **not** in what he has **but** in what he is. (人の価値は、その人の持つ財産にではなく、その人柄にある。)

not A but B (「AではなくてB」= B and not A または B, not A) は頻繁に用いられますが、この not も文頭の方へ繰り上がることがよくあります。つまり、A man's worth **doesn't** lie in what he has **but** in what he is. となることがよくあるわけですが、こうなると途端にその形が見えなくなってしまう日本人は多いようです。もっとも、not を繰り上げるのであれば本来なら、A man's worth **doesn't** lie in what he has(,) **but lies** in what he is. と、but の直後に肯定の動詞をもう一度置いてはじめて筋が通るものなので、形が見えなくなってしまうのも無理もないことではあります。下も繰り上がった例です。

The punishments for violating the statute did **not** vary by condition, **but** by race and gender.

Unlike most large canids, wild dogs do **not** announce their presence by howling, **but** with a scent message that can last for months.

ただし、not only A but (also) B と not because ... but because ... においては繰り上げない方が多いようです。「**not A but B** の A と B がごくごく単純なときにだけ、not は繰り上がりやすい」と言えそうです。下は、繰り上げてはいない例です。

I stand in awe **not only** of her beauty, **but also** of her talent.

She became a folk hero **not only** to her own people **but also** throughout the world.

これらの例の not を繰り上げてみましょう。

I **don't** stand in awe **only** of her beauty, **but also** of her talent.

She **didn't** become a folk hero **only** to her own people **but also** throughout the world.

このようにわかりにくくなるので、繰り上げるべき積極的な理由は無いと思いますが、繰り上げた例も無いわけではありません。下は繰り上げた例です。

Attention should **not** be paid **only** to big enterprises, **but** to smaller businesses **as well**.

He **not only** speaks French **but also** German. = He speaks **not only** French **but also** German.

※ not only A but (also) B においては、A と B が異なる動詞なら、not only を一体として主語の直後に置きます。

I **not only** heard it (**but**) **also** saw it. He **not only** does not work **but** will not find a job.

not because ... but because ... の例です。これについても not を繰り上げない方が意味明瞭であって、多数派です。

I'm telling you **not because** I hate you **but because** I love you.

He is frowning **not because** he is angry **but because** he has (a) toothache.

繰り上げた例です。

I'm **not** here **because** I want to be, **but because** I have to be.

Generally speaking, workers **didn't** start punching the clock **because** they were forced to **but because** they wanted to.

## 比較の構文における否定語の繰り上がり

Tom is taller than any other boy in his class. を、Any other boy in his class is not taller than Tom. とすることはできません。正しくは No (other) boy [None of the boys, Not one of the boys, Nobody] in his class is taller than Tom. です。次の例でも同じです。

## 2つのかたちの疑問文

- (a) **Do you know** who he is? (彼が誰だか知っていますか。)  
 (b) **Who do you think he is?** (彼が誰だと思えますか。)

(a) の一般疑問文には Yes か No で答えます。間接疑問文なので、Do you know who is he? とはしません。  
 (間接疑問文とは、もとは疑問文だったものが文中に取り込まれて主節の vt の目的語=名詞節となるものです。)

(b) の特殊疑問文では、基本的に聞きたいことは Who is he? ですが、それに do you think が挿入されて、やはり間接疑問文のように扱われます。Who do you think is he? とはしないように。答えは、例えば (I think) he is Mr. Suzuki. となります。suppose, consider, believe, imagine などこの形をとります。

(b) の形を作れない人は少なくありませんが、「何を聞きたいのか」と「想定される答え」を考えれば容易に区別できます。

- **Do you know** where she lives?      × Where do you know she lives?  
 ○ **Where do you think she lives?**      × Do you think where she lives?  
 ○ **Do you know** how long it will take to finish the work?      × How long do you know it will take to...?  
 ○ **How long do you think it will take** to finish the work?      × Do you think how long it will take to...?

動詞によってはどちらのパターンもあり得ます。

**Did he say** where he was going?

**Where** did you say **I should turn in** the form? (この申込用紙はどこに提出するようにおっしゃいましたか。)

know も、How did you know she was still alive? のように How を文頭に置いて (b) パターンをとることもあります。

ところで **Can you guess** what it is? では、それが何であるのかの「見当がつくかどうか」を聞いています。だから（見当がついても）それが何かを答える必要はありません。しかし実際には、この文に対してはそれを答える人も多いと思いますし筆者もたぶん答えますが、厳密には、質問者は Yes か No かを聞いているのであって、それ以上の答えは求めていません。したがって、（この質問が例えばクイズの枕だった場合）「余計なことまで答えやがって」と思われるかもしれません。とは言えそれは特殊な状況であって、普通は **What do you guess it is?** のことだと解釈して差し支えないでしょう。ところが、例文検索をしてみると、guess については (b) のパターンは、How did you guess I'd got a secret plan? のような How を文頭に置いた例以外はヒットしません。したがって **What do you guess it is?** とは普通は言わないと思われそうですが、このことからつまり **Can you guess** what it is? は Yes, No を問うこともあれば、What do you think it is? の意に近いこともあるのだろうと考えてよいと思います。Did he say how the argument started? 「議論がどんな具合に始まったか彼は話しましたか」でも、質問者が実際に聞きたいのは How did the argument start? である場合が多いでしょう。

先に『何を聞きたいのか』と『想定される答え』を考えれば容易に区別できます」と述べました。ここで述べたことはそれとは矛盾する内容ですが、やはり言葉なので、「何を聞きたいのか」は以心伝心で判断される部分もあるであろうことを言い添えておきます。

### 疑問代名詞を主語にすると常に単数扱い (この内容は 33-8 からほぼ重複して載せていますが、33-9 上も参照ください。)

例えば次の文の英訳を考えてみましょう。

日本の高校生は自分で考えるくせをつけないうまま大学に行く。これは一体誰の責任だろうか。

これに対する答えを、「学生個人と組織・体制の関係者らの複数人」と想定して、Who **are** responsible for...? とやってしまう人は少なくありません。しかし、疑問代名詞としての（主語としての）who は常に単数扱いなので、そのような想定も配慮も無意味です。ここは英語のルールに従うしかありません。Who **is** responsible for...? が正しいわけです。

## 再帰用法 = vt の (意味の上での) vi 化 (= 転換自動詞 converted intransitive)

vt を意味上の vi へと変換するときには再帰用法がよく用いられますが、それを用いる理由は次のように大別できます。

1. vi の用法がないため。
2. vi の用法はあるが vt の用法が優勢なため。
3. vi の用法と vt の用法のどちらもあってその優劣はつかないものの、目的語である再帰代名詞に強く働きかける、つまり、「～自身を」「～自身に」の意を強く打ち出すために vt を用いる。

present oneself, content oneself, remind oneself は1の例、enjoy oneself, dress oneself は2の例です。

I've been **keeping (myself) busy**. 「ずっと忙しい日が続いています」では **myself** を入れるべき積極的理由は普通はありませんが、I managed to **keep myself upright**. や I've been **keeping myself in seclusion**. 「ひっそりと暮してきました」のような例では入れた方が感じが出ます。このような例が3にあたります。

別の言い方もないわけではないのにこのような表現法を採るのは、日本人からすると面倒なだけのようにも思われるかもしれませんが、しかし敢えて言えば、英語ではこの表現法は「王道」であって、奇をてらっているわけではありません。

I made as much haste as I could to **hide myself** among the trees.

Kylie tried to **hide** from the stranger. (よそ者から身を隠そうとした)

それぞれの動詞にはそれぞれの歴史があります。現在でも vt の用法しかないものもありますが、vt しかなかったのに利便性から vi の用法が現れたものもあります。hide はその例かと思いますが、このような例も、vt が優勢だとしてもどの程度優勢なのかは、これまでの歴史と現在の使用状況を調べなければわかりません。したがって、2と3の区別は簡単にはできない部分もあります。(vt が vi の用法を獲得したもの比べると、vi が vt の用法を獲得した例は少ないのではないかと思います。vi のみ、あるいは vi の用法が優勢な動詞なら少なくともはありません。)

I keep **telling myself** I will win next time. 「次は勝つぞと自分に言い聞かせている」はストレートな表現ですが、下のような例にも、この例ほど強くはないものの、目的語である再帰代名詞に働きかける感じがあると思います。

例えば remove oneself from a room を『ランダムハウス英和大辞典』では「(大げさに) 部屋を去る [立ち退く]」としています。

Let's **warm ourselves** in the sun. You must **provide yourself** with a lunch. (お昼は自分で用意しなさい。)

She **absented herself** from the meetings. ※ was absent from ... よりも「故意に」のニュアンスが強い。

You always **attach yourself** to people who end up hurting you. (君が慕う人たちは、結局はいつも君を傷つけている。)

She **reminded herself** to smile and look happy. (笑って幸せそうに見せようと自分に言い聞かせた。→ 意識的に～しようとした。)

I **surprise myself** by not caring about it at all. (それが全く気にならないのには我ながら驚いている。)

The event **impressed itself** on his childish mind. (その出来事は、幼い彼の心に深く刻み込まれた。)

We no longer need to hunt in order to **feed** or **clothe ourselves**. (食事をとり服を着るために)

The Vietnamese are trying to **assimilate themselves** and become Americans. 「(米国に) 同化しよう」と

英語の vi / vt の区別は厳格で、vt にはそのペアとなる目的語が不可欠です。(受動態もその変形です。) そのような規律があるからこそ、学びやすい言語であることは確かだと思います。

(それゆえに筆者は 16-1 で vi / vt を、例えば「独立動詞／併合動詞」といったように、はっきりと定義する方がよいと提案しました。ただし、同じく 16-1 で述べた文末での目的語なしの vt の使用や、次に述べるような再帰用法の形骸化、つまり vi 化など、言葉ゆえの例外は、やはりあります。cf. This will **help alleviate** the pain. → 1-5 の注4)

## 10. その他

## 関係代名詞のあとに形式主語を置く例

関係代名詞のあとに形式主語を置くことがあります。たまに見かける表現法です。

a personality that **it** is impossible to dislike (憎めない性格)

上の例からわかるように、この **it** にたいした意味があるとは思えませんが、もったいをつけた表現であることから、**it** を置いた方が強調した感じにはなるかと思います。

It was the kind of rumour that **it** is impossible to refute. (それは、一旦広まってしまったら収拾のつかない噂のたぐいだった。)

... each citizen should receive the best education that **it** is possible for him to receive.

It is, I think, a belief I share with the great hopeful majority, and a belief **it** is dangerous to hold, because....

関係代名詞のあとに形式主語 **it** を置けば、**that** と **it** で注意を引いて、かつ自然とポーズも入るので、強調の効果を期待できます。(極めて単純な例を挙げるなら、**She doesn't like you.** よりも **She does not like you.** の方が、言い方としても書き方としてもきつように、一語一語をはっきりとさせると強調することにつながります。)

## A is to B what C is to D. の構文について

よく目にする構文ですが、文法構造は次のように分析できます。

例えば **Air is to us what water is to fish.** では、本来は **Air is what water is to fish to us.** の語順です。つまり、**Air is C to us.** の補語 **C** が本来の位置から外れて後置されたものがこの構文です。**what water is to fish** は「魚にとっての水に相当するもの」ということで、「空気は我々にとってはそういうものである」ということです。**To us, air is what water is to fish.** と語順を変えてみてもわかりやすいと思います。

ところで、**what** ではなく接続詞の **as** を使った同意の例が多数検索できますが、その構造は **what** を使った例よりもかなりシンプルです。

**Reading is to the mind as food is to the body.**

このような例での **as** は、「～(する)ように、～(する)ごとく」(**in the way that ...**) のことなので、**what** の例のような語順の入れ替えがありません。このままの語順で簡単に理解ができます。

**Three is to nine as [what] nine is to twenty-seven.** (3の9に対する比は9の27に対する比に等しい。)